

プロティノスと欲求する一者——『エンネアデス』VI 8 [39] をめぐって——

「一者を考える」とは

左近司 祥子

(1) 工夫の限界

……一者を考える方法とその問題点……

(a) 四つの工夫

プロティノスが壮大な宇宙論を持っていることに異議をはさむ人はいないだろう。壮大なというのは、近頃流行りの宇宙論などは小さいものだと言わせる規模のものだということである。この宇宙の誕生など、大きな「知性界」誕生の亜流にすぎないのである。

ここで言われている知性界というのは、プラトンの言っていたイデア世界のことである。この世が知性界の亜

流であるのは、この世にあるものどもがイデア共の垂流だからにほかならない。イデアとこの世のものの関係は、プラトンによると、本物 (on) とその類似品 (eikōn) の関係ということになり、そう言った時点で優劣は決まってくる。この関係は、いろいろな言い換えられもするが、中でも、イデアを一、この世のものを多と呼ぶ「一と多」はキーワードになる。というのは、一と多という関係で物事を考えていこうとすることこそ、ギリシャ哲学始まって以来の企てだったからである。

プロティノスは、この、一こそ最高と言う、ギリシャ哲学の伝統をきっちり受け継いだ。かれは、イデア止まりになるのを許せなかった。確かに、何千億の個人に対して、イデアの人間は一人である。しかし、イデアは人間にだけあるのではない。猫のイデア、犬のイデア等多数のイデアがある。だから、イデア界と呼ばれるのである。とすれば、それ以上に優れたものとして、絶対的な一が必要になるではないか。

というようなわけで、数の多少が、即座に優劣を表すというギリシャ哲学のパターンにのっとって、プロティノスは、単純な一を最高のものとして頂点に置くヒエラルキーを作り上げたのである。一者の次に位置するのが、イデアの集まる知性界である。その次が魂に支配されている、この世界ということになる。この世界に関して言えば、直接の支配者は魂であり、被支配者は物体である。もちろん、被支配者である物体にも、自分の内に支配者である魂を持っている場合と、そうでない場合とあつたりするが、支配者の魂の側も、知性に近い高級なものから、魂の影という呼ばれ方をする動物や植物の魂（自然と呼ばれることもある）まである。物体の下にあるのが素材である。これはヒエラルキーの底辺をなしているものであるから、数の一番多いものである。多いというより定まりなく無数と言うべきなのだろう。

私がこの小論で扱うのは『エンネアデス』VI 8 [39]『一者の自由と意志について』と題されるものである。主題は一者である。しかし、一者について語ること、考えることは極めて難しいことである。なぜなら、語ること

も考えることも言語で行われるものであるが、プロティノスの考えている一者は言語を越えたもの、言語と相容れないものだからである(1)。もっとも、言語と相容れないのは一者だけではない。じつは、末端に位置する素材もだし、知性(界)もそうである(2)。逆に言えば、語ったり、考えたりという、言葉を使う行為が安心して行えるのは、この世界についてだけということになる。

たとえば、次のようなことである。一者が、プラトンの言った善のイデアと同じものであることは、プロティノスも明瞭に認めているが、それでも、*to agathon* (善なるもの) という言葉を使うことに躊躇いを示す箇所がある。一なるものののに、*to agathon* の二単語で呼ばれるのはおかしいというわけである。だから、*tagathon* というべきだという子供じみた話も出てくるくらいである(3)。もちろん、中世の否定神学のもとになったとされる、否定の $\gamma\epsilon\gamma$ で語られることもある。たとえば、「形相を持たないもの(*an-eidos*)」(4)という具合にである。しかしこれは、同じく、言葉と相容れない素材についても言えることであり、その意味で、一者の特性だけをずばり言う言葉ではない。

そういつた中で、一者について語ろうとするなら、工夫が必要である。このVI 8 [39]では、一者に自由意志があるかどうかをはっきり語ることがテーマとなる。そこで、そのための工夫として、プロティノスは、VI 7 [38]『イデアの群れはどのようにして生じたか』三十六章で(5)、次の四つを挙げる。*analogia*(類比)、*aphairesis*(削り落とす)、*gnoseis ton ex autou* (一者から生じたものについての認識)、*anabasmoi tines* (上り階段を昇ること)である。

これらがどういう工夫で、どう使われているのか、一者に関して見る前に、知性(ヌース)の事例で考察してみたい。上述のように、ヌースについても日常的な語り方は不可能であるわけだが、それにもかかわらず、他の要素を一切許さない一者ほどは私たちから遠いものではないからである。

さて、自由意志を問題とするVI 8「39」は全編にわたって、欲求が問題とされる。意志というのは、ある目的を欲求することだからである。ところで、プロティノスは、この論文では、一者やヌースにも欲求を認めようとする。しかし、このことは、普段のかれにとっては出来ないはずのことであつた。プロティノスは他の論文では欲求（Ⅱ愛）を魂にしか認めていないからである。それはなぜで、どういう工夫をすること、その困難を切り抜けたのかを、まずヌースで、それから一者で見てみよう。

#### (b) 工夫の働き

##### ①ヌースと欲求あるいは愛(6)

後期の作品のIII 5「50」「エロースについて」の中では、欲求はヌースに否定される。この作品中でのエロースの定義は「エロースとは善きものを欲求する魂の活動である(7)」。「欲求はいつも欠乏している(8)」であるが、これを合わせると、欲求とは「自分に欠けた善きものを求める、魂の活動」と言う、プラトンに従つた、伝統的な考え方になる。そもそも、「ヌースは自分自身を十分に持っている、持っているので酔つたりはしないのである(9)」。こう言われた欠けることのないヌースにはエロースは有りえない。ところで、「自分自身を十分に持っている」と言われるときの、この「自分自身」であるが、それはヌースの直知対象である、形相・イデアのことである。そして、ヌースはもともと形相と同一である(10)のだから、その意味ではヌースが「……欠けること無く充実している……(11)」と言われるのは当然のことである。「形相を求めるのは、形相と欠如の中間にある素材である(12)」というアリストテレスの言に因つても、ヌースには欲求は認められないことになる。

それなのに、VI 8「39」ではヌースに欲求があることになる。ヌースは「善を欲求しているので、自分であること以上に、かのものであることを望むのだ(13)」という句で、あっさり、無欠のヌースに欲求が認められてし

まうのである。もちろん、このときの欲求対象は、イデアのこと即ち自分のことなどではない。自分以上の「かのもの」、すなわち、一者のことである。一者を欲求対象として挙げることにより、ヌースに欲求が認められることになったのである。

この思考の裏には、先述の工夫が働いている。プラトン以来の伝統といってもよい、魂とイデアの関係を一段進めることによって、イデア（＝ヌース）と一者という新しい関係（魂・イデア＝イデア・ヌース・一者）を作りだしたのである。ここには「一者から生じたものについての認識」から、「類比」の方法を使って一步「上昇」した話をするという、あの工夫のうちの三つが認められる。

## ② 一者と欲求・愛

以上と同じやり方で一者の場合も処理できるだろうか。魂とヌース、ヌースと一者、一者と？ これは直ちに行き詰まる。一者の先には何もない。そもそも、そういった類のヒエラルキーが考えられていたのである。ここから、直ちに、一者には欲求はないと結論付けるべきところである。しかし、プロティノスはそうしなかった。かれは、一者に自己愛を認めたのである。

このためには、もちろん、いままでの三つの工夫ではすまない。たしかに、三つの工夫だけで、ヌースの欲求を語ることはできたし、ヌースの欲求と魂の欲求の違いを、欲求対象の違いで語ることもできた。しかし、それ以上の違いが実はあったのである。欲求者と欲求対象の居場所の違いである。

魂とヌースとは居場所が異なる。それは、魂のうちの極めて善良な部分は知性界の端に留まっているということとも言われはするが<sup>(14)</sup>、それにしても、それは魂の一部にすぎない。しかし、ヌースについては、「ヌースは……善の外にあるのではなく、善の内にある……<sup>(15)</sup>」と言われる。とすれば、魂の欲求対象は、自分にとって自分とは異なるもの、即ち、外なるものであるが、ヌースの欲求対象は自分を抱えてくれているもの、自分がその内に

有るものということになる。

多よりも一を善いとするポリシーに支えられて体系を考えているプロティノスにとって、外は悪しきものであった。外というのは、かならず、或るものの外ということであり、或るものと外の二つを想定するからである。それに反して、内というのは、自己同一性を暗示する表現であり、単一性の別の言い方である。

自分の欲求対象を自分の元に持っているということは、だから、単一性に近づいているということである。欲求者と欲求対象の関係が外から内へと変ったのは、多を削って一に近づいていくという、削り落としの工夫によるものと言えよう。

ヌースは一者と、始めから一緒にいるが、けれども、他人なのである。とすれば、一者に残される欲求対象は、同じ削り落としの工夫によって、「始めから一緒にいるし、他ではないもの」とすることができよう。そういったものは、あの一者にとっては自分以外に考えられない。この単一性を求めている削り落としの結果出てきたのが一者の自己愛なのである。VI 8 [39] 十五章で語られるのがそれである。

### (c) 工夫の限界

一者が自分を愛しているということは、一者の美は「……自分を原因に、自分の中にある……(16)」とされていることから想像できるように、一者が自分を眺めたり、自分にほれほれしたりしているようで、鏡を覗くナルシストめいて不気味だということはある。

しかし、それ以上に、かれの自己愛は困った結果になる。これまでの考察からすれば、かれの自己愛は、かれが自分にとって善であるからであった。しかし、VI 8 [39] の最終章では「……一者は自分にとってなにもでもない(17)」と念が押されているし、「一者は自分にとっては何者でもないが、他のものにとって善なのである(18)」

という同趣の句もある。そして、これらの方が、プロティノスの通常の考え方であるのは間違いない。

このような矛盾を犯してまで一者について欲求を語らなくてはならない理由は何なのか。あの四つの工夫全部を使うことによって、必然的に、一者の欲求がでてきたのだとするのは過ちである。すなわち、一から生じたものについての認識で何を持ち出すか、なにと、どういう観点から類比させるか、どんな上昇を考慮するのか、どう削るのが削り落としなのか、四つのどの工夫を中心に据えるのかは、工夫する人の恣意に委ねられているのである(19)。工夫は工夫する人の目的に応じてどうにでも使えるわけである。ここには、いわゆる、論証などに求められる、客観性・普遍性はみられない。一者に欲求を認めるという大目的がまずあったのだ。とすれば、なぜ、無理と矛盾の中、一者に欲求を認めようとしたのかということがここで問題になってくる。

## (2) 工夫以前にあったこと

### (a) 一者は活動である

VI 8 [39] で、一者の欲求は、一者の活動として認められるのである。しかし、一者に活動を認めていいのだろうか。一者は活動するのだろうか。

活動と有ることの関係は、ヌースの自由が問われる四章で取り上げられる。ヌースは「生まれながらの有り方に従って活動する(20)」のだが、それは有り方に従属した活動なので、自由な活動とは言えないはずだという異論に抗するために、プロティノスは、あの単一を求めるための「削り落とし」を行い、「かの世界では(これは知性界を指す)、有ることと活動することが同一であるとするなら……(21)有り方に活動が隸属するなどという言い

方は、知性界には相応しくないのでと主張する。すなわち、知性界では、この二つが一体化している、と言うのである。とすれば、新たな「削り落とし」が計られた結果、一者については、「その存在(hypotasis)」のようなものこそ活動のようなものである(22)」ということになる。これは、ヌースの場合のように、両者があつたうえで一体化などではない、もともと一つなのだということである。とはいえ、一者は、第一義的にはどちらの方なのか。有るようなものなのか、活動するようなものなのか。プロティノスは「活動は存在(ousia)より完全である(23)」という理由から、「もし、活動抜き存在(hypotasis)を認めるなら、そのような始源は不完全なものとなるだろう。……(24)」だから「存在(ousia)抜きの第一の活動を、認めるのを恐るべきでない……(25)」と言い、最も完全である第一のものは活動なのだとする。ようするに、一者のもともとの姿は活動なのであり、活動していない一者などありえないということになる。

## (b) アリストテレスの活動

ところで、活動といってきたのは、energeiaというギリシャ語で、これをテクニカルチームとして使ったのはアリストテレスである。かれは、エネルギー(現実態)とデュナミス(可能態)という単語を対に使って、存在の有り方を区別しようとした。Aでありうるのだけれど今はAになってはいないという有り方をしているものは、可能的にAだといわれるのであり、今Aとなっているものは、現実態としてAなのだと言われるのである。

現実態は可能態に先立つ、といったアリストテレスは、さらに、もろもろの現実態の中でも、あと先の関係はあり、あの「第一の動かすもの(神)」の現実態が(26)「最高のものと言う。すなわち、かれもまた、最高のものである神、すなわち、動かずして動かすものにエネルギーを、しかも、最高のエネルギーを認めているのである。



アリストテレスの認める、神のエネルゲイアというのは、あの、自己直知、「(神である)ヌースは自分自身を直知する(27)」ことである。

神の活動を直知としたのには、理由がある。運動と区別して語られる活動は、目的を自分のうちにもつものである。そこで、活動は「進行形と完了形が同じなのだ」と主張されることになり、その例として、「見ること」「直知すること」「生きること」が挙げられるのである(28)。こうなれば、神の活動が直知することだとなるのは当然である。

神であるヌースが自己直知を行う根拠は、かれの直知は「最善の直知」であり、だから、その直知対象も「最善のもの」だということにある。最善のものというのは、まさに、「動かずして動かす」といわれているかれのことだからである(29)。

### (c) 一者の活動は自己直知ではない

プロティノスも、一者に活動を認める。しかし、それは、欲求(自己愛)であり、アリストテレスの言うような、自己直知ではない。

もともと、プロティノスが一者に活動を認めるのは、このVI8 [39]にかぎってのことといえるだろう。他の論文では、一者に活動を否定することのほうが多い。たとえば、「……それゆえ、活動するものは、他のものに向けて活動するとしても、あるいは、自分の内で活動するとしても、自分を多にしてみかねばならないのである(30)」ということ、自分の外にも何も持たず、まして自分が多となることを認められていない一者には活動は無縁だということになる。

とはいえ、よく見ると、その多くの場合、活動、あるいは、活動することと考えられているのは、直知作用の

こと、あるいは、直知することである。

一者の活動には直知は認められないというのである。そのわけは、Ⅲ 9 「13」『雑考』七章にある。「直知するものは、たとえ自分を直知するとしても、二重であり、欠けたところのあるものである、なぜなら、直知することによって善を手に入れるのであって、存在することそのことによってではないからである(31)」

一者が直知活動しない理由は、二つに分けて考えることが出来る。

①直知作用が成立するためには、どう少なく見ても、直知するものと直知されるものという二つのものが必要である。自己直知したところで、普通の意味で二つとは言えなくても、自分に返る行為であるから、二重(duplicate)とは言える。そして、このことは本当の一には許されることではない。

ところで、それだけが、一者の直知しない理由だとすれば、欲求も一者には似合わないことになる。自己愛であらうと自分に返る行為である。愛するものと愛されるものは二つ、あるいは二重であることが要求されるからである。

一者に自己直知が許されず、自己愛は許される理由が②である。

②「直知するものは欠けたものである、直知することによって善を手に入れているのであって、存在することに依ってではないからである」。存在することによってというのは、それが有るだけで、なんの努力も無しに、ということである。直知するものは善くならなくてはならず、そのために、努力が必要で、その努力が直知することだというのである。

直知するものであるヌースが「欠けたもの」といわれているのは、「充足したもの(クロス)」であると随所で(Ⅲ 8 「30」『自然、観照、一者について』十一章(32)、Ⅵ 8 六章(33))言われていることと相容れないようにみえるかもしれない。しかも、ヌースの欲求について語った際明らかになったように、ヌースは善ではないけれど、

ヌースは善の中にあるので、善に不自由してはいない、すなわち、善を欠いてはいないはずでもある。ただ、考えなくてはいけないのは、ここで取り上げたこの句は、対句になっているということである。一方は、「存在することによって（存在するだけで）善を手にいれている」もののことである。これは、当然、一者のことをさすのだが、一者はもう努力無く善なのである。この一者と比べたとき、もう一方のヌースは善を手に入れる努力の必要があるわけで、その分欠けているといわれるのである（34）。

もしそうだとすると、ヌースの行う自己直知は、アリストテレスの言うような、自己目的的行為ではなくなる。善を手に入れるという、直知以外の目的のために行われるからである。そうなれば、自己直知は、アリストテレスの規定からしても活動ではなく、運動ということになり、そういったことを、プロティノスが一者に認めることはありえないのである。

#### (d) 一者の活動は自己愛である

では、プロティノスの場合、一者の活動として自分への欲求が認められるのはなぜだろうか。

アリストテレスが、これを認めなかったのは、欲求という単語を思いつかなかったからではない。「動かずして動かすもの」は、欲求されるし、思惟されるもの（35）として語られている。そのうえで、「第一に欲求されるものは、真に善いもの」なので、「真に善いものであるヌースは、この（欲求された）真に善いものをその直知対象とするのだ」（36）という自己直知の論に結びついていくのである。ただ、この神は、直知の対象であり、欲求の対象であり、さらに、直知するものでもあるのだが、欲求するものではないのである（37）。

アリストテレスが、神に、直知は認めながら、欲求は認めなかったのは、かれにとつては、欲求は活動ではなかったからと思われる。欲求は、そのこと自体を目的とする事例のなかに挙げっていない。アリストテレスの「自

然学』の記述(38)を見ても、プラトンの考えても、欲求の目的は、手元にはない善いものの獲得である(39)。

プロティノスの場合はどうなのだろうか。欲求・愛の目的は、やはり、善を手に入れることである。しかし、自分が善である一者の場合、その目的は善の入手でも保持でもない。まさに、自分そのものであることである。この目的の差を表現したのが、前述の、「二者は他のものにとつては善だが自分にとつては何ものでもない」ということだった。ここでの善とは手に入れたものということである。

さて、直知、欲求それぞれの特殊性を考えることなく、形式的に二重性を語ってしまったのだが(10頁参照)、内容に立ち入った上で、両者に、同様な二重性を考えるのが妥当かどうか確かめたい。

直知に関しては、「……直知する場合、ヌースは差異性と同一性を必ず持つている。そうでないと、ヌースは直知されるものから自分を、自分とその異なるものとの関係によつて、区別できなくなる……(VI 73 三十九章(40))」ということからも明らかのように、そもそも、直知することは、直知するものとされるものを、まず、異なるものとするによつて可能になるのである。そのあとも、これとあれとは異なると主張することが、同じと主張することと同時に行われなくてはならなくなる。差異性をはなれて直知活動もヌースもありえないのである。

では、欲求あるいは愛はどうだろうか。たしかに、このばあいも愛するものと愛されているものに分けて考えられる。その意味で、先述のような二重性が生じることにもなりそうである。しかし、そもそも愛は異質なものさへ結び付ける力として考えられていたのであつた。分けるのでなく結び付けることがその役目なのである。とすれば、自己愛の場合には、自己直知の場合のように、異なりが要求されることも、必要となることも、結果して起こることはないだろう。

以上のことから、プロティノスの場合、一者に活動を見いだすとすれば、自己直知ではありえないことは明らかである。そして、目的といい、対象といい、そのどちらも自分であるので、一歩も外に出る必要のない行為で

ある自分を欲求することこそ、一者に相應しいとなるのである。

(e) 一者が活動であるわけ

アリストテレスとプロティノスの差は、アリストテレスが欲求と思惟の関係を語って、「思惟がアルケー（始源）である」と言ったときに決まっていたのかもしれない。プロティノスは「欲求（愛）がアルケーだ」と言いたかったのである。（41）

しかし、いずれにしろ、二人が共に、それぞれの最高の者（神）に活動を認めていたのは事実である。なぜなのか。

なにがあつても、神を静止させなくなかった理由は、アリストテレスの言葉で言えば、「神は永遠で最高に善い生き物である」（42）ということだろう。あるいは、プラトンの「……完全に有るものに動とか生命とか魂とか思慮とかがないなどということがあろうか（43）」だろう。これは、プロティノスがしばしば引用している『ソピステス』の中の一句である。

しかし、だからといってアリストテレスは神に、静止の対である運動を認めたりはしなかった。なにしろ、「動かずして動かすもの」として要請された神である。神自身に運動を認めるわけにはいかない。そこで、運動の特徴を「未完了（アテレース＝目的のないもの）である（44）」とすることによって、目的を内に含んだ、さらに言えば、その動きそのものが目的であるといったそのような動きを活動と呼んで運動と区別し、これを神に認めることにしたのである。

プロティノスも、一者について、アリストテレスがヌースにしたと同じことをしようとする。それでも、一者の活動を言いだすにはためらいがみられるのである。「一方、なにか或る活動がかれ（＝一者）のうちにあり、わ

たしたちがかれをその活動のうちに置くとしても、だからといって、活動の元であるかれが自分とは別のものとなるとか、自分の主人であることを辞めるとかいうことにはならないだろう。(45)にしても、この「なにか或る活動」という句は腰の引けた表現である。さらに、実はこの「一方」は次の「他方」に呼応しているのであるが、その他方のほうでは「わたしたちが、活動がかれのうちにあることをまったく認めない場合でも……(46)」と繋がっていくのである。このように十二章で、一者の活動が取り上げられたときには、まずは、選択肢の一つとして、一者の活動を提案するといった極めて消極的な方法がとられた。十三章に入ると「……もし、わたしたちがかれに活動を認めるならば……(47)」という句があり、「かれの活動は、かれの意志のようなものであり、かれの存在(being)のようなものだ(48)」とかれの活動を認める側の話だけを語るようになっていく。ここで、ようやく、活動のようなものを認めるという肯定的な方向に一步を進めたのである。そして、ついには、(2)の(a)で述べたように(8頁参照)、一者は存在抜き活動であるという、アリストテレスの思いもつかなかった発言をして、一者に活動を認めることになるのである。

### (3)工夫の意味

以上のことから明らかになったのは、一者の活動を自己愛とする考えは、アリストテレス、プラトンを踏まえた上で出てきたものだということである。わたしたちも、そう分かって始めて、この考え方に納得するし、当時の哲学者だったら、なおのことそうだったろう。しかし、そうなると、あの一者を語る工夫にはどんな意味があったのか。結論は工夫抜きで、すでに出ているのだし、みんなはそれに納得している。

プロティノスにとって、大事なことは、一者を語るのではない。プラトンから譲り受けた「神と親しいものになること」、「神に似ること」(49)である。もちろん、「神に似る」の主語は、この世に生きているわたしたちである。だから、神のしていることが、この世のわたしたちのしようとするに関わりがないとしたら、たぶんそれを語ることの意味はなくなっただろう。

かが、ここで、一者に自己愛を認めたということが、重大なことなのである。一つには、かが、人間のあり方から切り離すことが出来ない、愛または欲求の全否定をしなかったということである。それは、神を欲求されるだけとしたアリストテレス説との違いである。私たちは、欲求心を根絶することを要求されてはいないのである。

この考え方は、プラトンと軌を一にしている。『饗宴』でプラトンが愛を語るとき、どんな愛も否定したりはしない。肉体に向かう愛に重きを置かないようにと勧告するだけである。愛を肉体にだけ向けたりせず、別のもの、そして、最終的には美のイデアに向けるよう勧めるのである。

二つ目は、自己愛だったということである。一者はその有り方の中に「自分のことが気に入っていること」(hauiou arekesthai) (50)を含み持っていると言われ、これが一者の自己愛活動の根拠となっている。ところで、考えてみれば、「自分のことが気に入っている」ということはわたしたちのよく知っている事態である。なにも、深遠な、見も知らないことではない。人は、自分の思いどおりことを運べたときなど特に、自分のことが気に入るものである。

しかし、わたしたちの自己愛と一者の自己愛には違いがある。わたしたちには自己嫌悪がある。思うようにことを果たせなかったとき、自分に寄せていた好意は裏切られ、自己嫌悪に陥る。自己嫌悪が異様に強かったときなど、自分の存在を抹消したいという人まで出てくるが、多くの人は、そのうち、見事に自己愛を取り戻すこと

になる。ということだから、わたしたちは、いつも、自分を気に入ったり、嫌ったりのシーソーゲームにいらつくのである。それは、プロティノスに言わせれば、気に入るに値しないものを気に入ってしまったからなのである。一者の自己愛にはそのような、値しない自分を愛することなどありえない。その意味では、私たちの自己愛と一者の自己愛は、同一視されてはならないのである。

私たちの自己愛は簡単に容認されるべきものではない。しかし、否定されていいものでもない。一者に由来するのだから、愛も悪くない、自己愛も悪くない。悪いのは、自己愛に値しない自分である。そこで、問題は、そのような自分の中に、自己愛に値する自分をどう出現させるかということになる。ここで登場するのがあの工夫なのだ。あの工夫は、一者を語る工夫として提案された。しかし、一者を語るということは、一者についての事柄を、自分にも他人にも納得させるということである。そして、それは、各人で、自分の中に一者を見出すことでしか可能にはならない。

だから、一者を語る工夫とは、結局のところ、自己愛に値する自分探しの工夫だということにもなるのである。

(51)

## 注

引用するプロティノスの論文名に関しては、本文あるいは注に述べられたことのない場合のみ、日本文のタイトルを示すこととし、それ以外の場合には、エンネアデスの第何巻の第何論文かという数字（それは、通常、ローマ数字とアラビア数字で表される）、年代順番号（これは、通常、括弧とローマ数字で表される）のみ記すことにする。なお、本文でも注でも、引用されるギリシャ語はローマ字化してある。ただし、ονのみ、εとせず、οのままだになっている。

(1) たとえば、VI 7 [38] 『イデアの群れはどのようにに生じたか』三十八章参照。



(2) IV 3 [27]「魂の諸問題についてI」十八章。知性界に居る魂が言葉をつかうはずがないという表現がある。

(3) VI 7 [38]「どのようなにして多数のイデアが生じたか、善について」三十八章10以下。

(4) 一者については、VI 9 [9]「善について、あるいは、一者について」三章43に、素材については、I 8 [51]「悪とはなにか、どこから生じるのか」三章31に、同じこの単語がでてくる。

(5) VI 7 [38]三十六章6以下。「anabasmoi」はプラトン「饗宴」211C3にでてくる、「階段」を使ってより完全な美へ昇っていく様を表す単語である。

(6) 「欲求あるいは愛」と題したのは、プロティノスがVI 8 [39]では同義語として扱っているからである。しかし、古代の哲学者、あるいは、プロティノスの他の論文ではどうなっているのだろうか。

#### ① 欲求と愛——古代ギリシャ哲学者の場合

欲求 *epithesis* といえば、アリストテレスを思い出すが、それ以前には、同じ内容のことが愛という用語で問題になっていた。たとえば、エンペドクレス。かれの場合、愛は、四元素と並んで、世界を形成する原理である。そのなかでの愛の役目は、普通では結びつかない異質なものを結び付ける力である。プラトンでは、哲学者の原型、自分のなかにないと気づいた善いもの、美しいものを追い求めるダイモーン、あるいはソクラテスその人ということになる。アリストテレスも、愛・エロースあるいはピリアという言葉ではなく、*epithesis*, *oregasthai* という言葉を使って、プラトンと同じこと、たまたま美しさ、善さに欠けているものが、それを求めることが欲求であると主張する。ここでの善さは形相のこと、欲求を持つものとは素材のことである。

#### ② 欲求と愛——プロティノスの場合

プラトンの真の理解者を自負するプロティノスは、愛と欲求について少し違った見解を示す。かれは、この二つを異質のものであると主張する。VI 8 [39]より一つ早い時期に書かれたVI 7 [38]二十一章6以下では「魂は自分と近い関係にあるもの (*oikeion*) を、善いからでなくて近しいから追いかけるのである……しかし、燃える愛は、近しい関係のものに、かしこからなにか別のものがやって来たとき、生じるのである(「追いかける」というのは、内容上、同章3の *epithesis* の言い換えと思われるので、ここでは、おいかける) 欲求する、として考えた」と言われている。そのあとに、ちょうど (*hoion*)、という接続詞で始まる節が来るが、その節でいわれているのが、物体と太陽の光の関係であるところから考えて、「かしこ」というのが、一者のことを指しているのは間違いないだろう。とすれば、「何か別の

もの (all) というのは、一者からの光ということになる。二十二章11以下の「……なぜなら、それ (ヌース) の美しさは、善の光を受け入れるまで、(魂に) 働きかけることはないからである……」というのに呼応している。

ということとは、自分と同類というだけでは、「欲求」は起きるとしても、愛は生じないということである。とすると、この二つで、かれは、古代ギリシヤにあった、事物を結び付ける二つの力を表そうとしたとも考えられる。「同類は同類」という結合原理と、異なるものでも結び付ける愛という結合原理とである。結合原理としての強力が求められるのは、なんといつても後者である。もつとも、前者に「欲求」などというかなり日本語としてインパクトのある訳語を与えているのは少し奇妙な感もあるが、プロティノス自身「燃える (sytonos)」という形容詞をわざわざ愛にだけ付けていること、愛の燃え始める前、すなわち、善の光が差し込む前は、美でさえ働きかけない (argon) と言っていること、それから考えて、日本語のインパクトはさておいて、epheis の方に穏やかな関係を割り振っているのは間違いないことである。

とはいえ、ここで扱おうと考えている VI 8 [39] でも同じ線で話が進んでいるかというところでは言えない。十五章1でかれは「愛 (eros)」を語りながら、直後の5では、なんの言い訳もなく、「欲求されるもの (epheton) と欲求するもの (epheton) は一つ」という「欲求」という単語に言い換えて、話を進めていくのである。このとき、かれの頭のなかでは、二つの単語は同義語なのである。ということは、少なくとも、VI 8 [39] を扱う際には、この二つの違いを問題にする必要はないということになる。

(7) III 5 [50] 四章22以下。

(8) 同前書九章49。

(9) 同前書同前章18以下。

(10) VI 7 [38] 九章27。

(11) III 7 [45] 『永遠と時間』六章37以下。VI 8 [39] 六章35。

(12) アリストテレス『自然学』192a3以下。

(13) VI 8 [39] 十三章12以下。

(14) IV 8 [6] 『魂の肉体への降下』七章7以下。

(15) VI 8 [39] 四章33以下。

- (16) 同前書十五章2。
- (17) 同前書二十一章24。
- (18) VI 7 [38] 四十一章28以下。
- (19) その証拠が、ただのヒエラルキーという観点から見ると、一者には愛はなくなるが、単一性の観点から見ると一者に自己愛が認められるというところで明らかに変わった、そのことである。どちらの観点を取るかは、一者に愛を認めたいかどうかで決まってくるわけで、どちらかの観点がより正しいとは言われていないし、言えもしないからである。
- (20) VI 8 [39] 四章4以下。
- (21) 同前書同前章27以下。
- (22) 同前書七章47以下。
- (23) 同前書二十章14以下。この一句は証明されているわけではない。それどころか、活動というのはenergeiaというギリシャ語であるが、これを最初に使ったアリストテレスの考えのなかでは有ること、有り方、といった有ると無縁なenergeiaを考えることはなかった。もつとも、プロティノスは、こういった意味でのenergeiaを一者に認めることは断固拒否しているのので、一者のenergeiaということなら、有と無縁の、あるいは、有に先立つものとならざるを得ないのは理論的に当然のことであろう。
- (24) 同前書同前章11以下。
- (25) 同前書同前章9以下。
- (26) アリストテレス『形而上学』第十二巻第七章参照。
- (27) 同前書第十二巻第七章1072 b 20以下。アリストテレス翻訳の場合、*poen* には「思惟すること」を当てるのが一般的であるが。ただし、この論文では、プロティノスが主であるので、プロティノスの場合に引きつけて、「直知すること」と訳すことにした。
- (28) 同前書第九巻第六章1048 b 23以下。神の活動として、見ることも生きることでもなく直知が選ばれたということではない。神は生きているという表現も1072 b 30 には出ているし、見るというの、神の場合、直知と変わらないことになると思われる。即ち、神の活動としての生、直知、見は同一のことである。
- (29) 同前書第十二巻第七章1072 b 18以下。

- (30) V 3 「49」『認識する諸存在とそれを超えたものについて』十章 20 以下。
- (31) III 9 「13」七章 4 以下。
- (32) III 8 「30」十一章 38 以下。
- (33) VI 8 「39」六章 35。
- (34) ヌースは一人ではヌースにもなれないし、なつていられもしない。ヌースの有り様と一者の関係については中大路りつ子氏の博士論文に詳しい考察がある。
- (35) アリストテレス『形而上学』第十二巻第七章<sup>1072</sup>a 27 以下。「第一のものにおいては、欲求されるものと思惟されるものとは同一である」。
- (36) 同前書同前巻同前章<sup>1072</sup>a 29 以下。
- (37) アリストテレス『形而上学』第十二巻第七章<sup>1072</sup>a 26 以下。
- (38) 注 12 参照。
- (39) プラトン『饗宴』ソクラテスの演説参照。
- (40) VI 7 「38」三十九章 5 以下。
- (41) アリストテレスのこの句は『形而上学』第十二巻第七章<sup>1072</sup>a 30 以下。プロティノスのこの句は、これまでの考察から、筆者が想像したものである。フィチーノの場合も、プロティノスと同じ立場を取る。「人は知っているものを必ずしも愛さないが、愛しているものは知っている」と言い、知よりも愛の優位をとく。フィチーノ『プラトンの饗宴の注釈』参照。
- (42) アリストテレス『形而上学』第十二巻第七章<sup>1072</sup>b 30 以下。
- (43) プラトン『ソピステス』<sup>248</sup>E 以下。
- (44) アリストテレス『形而上学』第九巻第六章<sup>1048</sup>b 29。
- (45) VI 8 「39」十二章 22 以下。
- (46) 同前書同前章 25 以下。
- (47) 同前書十三章 5。
- (48) 同前書同前章 6 以下。

(49) プラトン『テアイテトス』176 B。プラトン『饗宴』212 A。

(50) VI 8 [39] 十三章10以下。

(51) 一者を語るためのあの四つの工夫が、具体的に、自分探しにどう関係してくるかについては、いずれ他の機会に論じるつもりである。

なお、キリスト教徒のフィチーノは、ここで語られている神の自己愛という問題にためらいを感じているように思える。自己愛の語られる十五章についての、かれの要約は、「もしなんであれ、自分を愛するのは、自分が善を分有しているその度合いに応じてであるとするなら、確かに、善自身は、最高に自分を愛している。……」で始まる。神の自己愛が仮定文の帰結として語られていることに注意してほしい。